



Title	浪曲師の歴史：社会的位相の研究―く芸人知の民俗学的研究にむけて
Author(s)	真鍋, 昌賢
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43327
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	ま 真 なべ 鍋 まさ 昌 よし 賢
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 6 5 0 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 13 年 9 月 21 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学 位 論 文 名	浪曲師の歴史-社会的位相の研究 - 〈芸人知〉の民俗学的研究にむけて -
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 川村 邦光 (副査) 教 授 中村 生雄 助教授 荻野 美穂 助教授 富山 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近代において語り芸として発生した芸能、浪曲に関する歴史-社会的背景を踏まえた事例研究による民俗学的研究である。序章「なりわいとしての語り芸を対象とするために」では、語り芸をなりわいとする演者の〈芸人知〉を研究対象とするうえで、これまでの口承文芸研究の方法を批判的に検討し、近代において最もポピュラーな浪曲を取り上げて、事例研究から演者の歴史-社会的位相を記述・分析する視点が求められていることを課題として提示する。

第1章「語り物の消滅」をこえるための視点」では、民俗学における口承文芸研究として、1960年代に衰退したとされる浪曲を取り上げて、近代において語り芸演者の動向が歴史-社会的背景から考察される。浪曲師は落語・漫才・音楽ショーと浪曲を結びつけ、浪曲の声・フシ回しといった身につけている実践感覚、著者のいう〈芸人知〉を利用して新たな「口演空間」を切り開いていったのであり、語り芸の「衰退」や「消滅」は新たなジャンルの活性化の過程だと分析される。

第2章「寿々木米若の演目選択：1940-1951」では、1930年代から浪曲界のスターだった寿々木米若の演目リスト『演目帳』に基づいて詳細な口演活動を歴史-社会的なコンテクストから跡付けて、エスノグラフィを作成している。戦前・戦後、米若は巡業を中心として、ラジオやレコード、映画といったメディアにおいても口演活動をしたが、国家や娯楽産業、業界内での共存・競合、そして客との関係のなかで演目が選択されたことを明らかにし、演者の「身体と声という〈場〉」には直接的な興業と間接的な複製メディア、諸制度と客、国家と資本といった複合的な諸関係が集約されていることを指摘する。

第3章「愛国浪曲をめぐる葛藤」では、1940年に政府の肝煎りで文学作家によって創作された「愛国浪曲」と呼ばれた浪曲を取り上げ、戦意昂揚の手段とした人々、興業師・浪曲師、娯楽として楽しむ人々、この三者の抱いた期待を探り、必ずしも挙国一致や天皇への「義理」といったテーマが受け入れられたわけではないことを明らかにしている。

第4章「乃木さんのひとり歩き」では、浪花節の乃木伝が国家イデオロギーを再生産する一方で、庶民感情を描く物語として受容され定着していったことを論ずる。

第5章「語りの力をめぐる批評の分析にむけて」では、戦後、民主主義科学者協会芸術部会で行なわれた浪曲をめぐる論議を取り上げ、「声の文化」における近代の意味が考察される。

結論「〈芸人知〉への視点と可能性」では、これまで議論してきたことを全体的にまとめて、語り芸を扱う視点を提起する。語り芸に対する民俗学的な口承文芸研究の視点として、浪曲師の状況に応じて流動的に展開される〈芸人知〉を発見し分析することの重要性を指摘し、身体と声を資本とする〈芸人知〉を研究領域とすることによって民俗学が他の研究領域と関わり合い対話できる可能性を提起している。

論文審査の結果の要旨

民俗学での口承文芸研究においては、これまで近代において最も隆盛を誇った浪曲が研究対象とされてこなかった。本論文では、柳田国男、及びそれ以降の口承文芸研究とその現状を批判し、語り芸としての浪曲を民俗学の対象として位置付け、その研究の方法と目的を鮮明に打ち出して、民俗学での語り芸研究の新たな地平を切り開いている。

本論文の特徴として、時系列に沿った浪曲の盛衰史が叙述されるのではなく、浪曲の歴史-社会的な位相を対象化するために、浪曲師個人の具体的な動向や演目に主題を絞った事例研究に各章を割いて、全体が構成されている点をあげることができる。この口承文芸研究で提起されるのが〈芸人知〉という概念である。民俗学における「口承」の重視は、近代社会において語り芸の衰退・消滅として語られた事態を問題化することができなかった。申請者はこの衰退・消滅の事態を〈芸人知〉という概念を用いて認識論的転換を企てている。すなわち、語り芸の演者・浪曲師がこれまで積み重ねてきた口演を通して、聴衆の需要や興業制、政治的状況などとの関係において獲得してきた、芸人として知の領域である〈芸人知〉を発揮して新しいジャンルを切り開き、口演空間を活性化してきたと論じられている。この生業として語り芸がどのように展開していったのかという視点は斬新なものであり、これまでの民俗学的な口承文芸研究を批判し新たに発展させるものとして評価できる。この〈芸人知〉の展開の事例研究として、寿々木米若の残した1940年から1951年に及ぶ口演記録を数量化・リスト化したデータを提示して、芸人のエスノグラフィを作成した第2章は、本論文のなかで最も力量が発揮されて、すぐれてオリジナルなものとなっている。浪曲が近代の国民国家における国民統合の理念を感性レベルで民衆に向けて語って受容され、戦中においては草の根からファシズムへ動員していったとする見解に対して、浪曲師個人の口演した演目、また「愛国浪曲」という国策浪曲に対する聴衆の聞き方や口演法に着目して、浪曲師が〈芸人知〉をもって客受けを内面化しつつ、国家の期待や統制と関わり合いながらも、聴衆の好みに応じていたことを明らかにした点は、文化の政治学的な視点からの考察として重要な意義をもつ成果である。

本論文は民俗学の閉塞した状況を批判し、他の研究領域へ問題提起するものとして大いに評価できる。だが、全体的な構成と論述法においては問題点がないわけではない。本論文のテーマとなっている〈芸人知〉が個々の浪曲師においては丁寧に興味深く描かれているが、歴史-社会的な状況においてどのように展開したのか、そのダイナミックな様相が論じられていない。それは各章が有機的に連関していないところに起因しているといえる。

しかし、このような問題点は、本論文の達成した成果を損なうものではなく、むしろ研究を深化させていく今後の課題として考えられるべきものであり、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容を有するものと認定する。